

知盛の位置

板坂, 耀子
福岡教育大学助教授

<https://doi.org/10.15017/11931>

出版情報 : 語文研究. 66/67, pp.41-50, 1989-06-10. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

知盛の位置

板 坂 耀 子

この考察は、平家物語覚一本による。また文中に使用する「作者」の語は、成立に携わった多くの作者たちの総称とする。

はじめに

岩波新書「平家物語」中で石母田正氏が、平知盛を重要な人物としてとりあげられたのは、周知の通りである。氏はそこで、知盛を重盛と並んで、作者の運命観を表現する人物の一人としてとらえられた。重盛に比すと、「一方の大將ではあるが、めだたない存在」であり、しかし一読後、忘れがたい印象を残すとして、その魅力のさまたまを指摘しておられる。この評価は今日でも変わっていない。教育社歴史新書「伝説の時代」で志村有弘氏が知盛を「『平家物語』作者の代弁者とも称すべく、徹底的に運命に支配された人物」とさされているのも、その一つであろう。^{註1}

知盛が、作中で重要な人物であることは、私にも異論はない。作者の代弁者や分身であるというのも、うなずける。ただ、それが、どういう意味でそうなのかということについて、今少し考えてみた

い。謡曲「船弁慶」やその影響下にあるとはいえ、浄瑠璃「義経千本桜」が、知盛を華やかに活躍させているのを見ても、「めだたない存在」のように見えて知盛は、かなり注目される要素を有しているともいえるのである。石母田氏が評価された、近代の目から見ても魅力ある知盛の人間像は、むしろ、作中で彼が負わせられている役割から生じてきたものであり、その役割とは、かなり単純で図式的な意図に基くものではなかったかというのが、本稿の要旨である。

一 神仏の怒り

いささか唐突で、基本的すぎる問からはじめたい。平家一族は、なぜ滅亡したのであろうか。むろん、「平家物語」の中において、作者の考えでは、ということであるが。

有名な冒頭の一文において、既に作者は、諸行無常と因果応報という、一見まったく相反する見解を、この問に対して示している。定まるものは何もないという考えと、平家の滅亡にはしかるべき原因があるという考えとが、ここでは並列されている。

最終的にはこの矛盾は止揚されていると思うが、本稿ではそれにはふれない。ここでは、「平家」の作者が、因果応報というかたちで、それなりに、歴史の法則性を発見しようとする姿勢を有していることを、指摘しておきたい。

さまざまな政治的事件や反乱の原因について、作者はそれを追及し、説明したいという態度を随所で示している。

「抑源三位入道、年ごろ日比もあればこそありけめ、今年いかなる心にて謀反をばおこしけるぞといふに」(巻四「競」)として、宗盛が源三位頼政の子仲綱に屈辱を与えた事件を記し、これに怒った頼政が、「宮をすゝめ中たりける(高倉宮以仁王に平家討伐をすすめた)とぞ、後にはきこえし。」(同上)と、高倉宮の乱について説明する。頼朝の旗上げについても「抑かの頼朝とは」(巻五「文覚荒行」)と、その経歴にふれた後、「年ごろもあればこそありけめ、こ」といかなる心にて謀反をばおこされけるぞといふに、高雄の文覚上人の申すゝめられたりけるとかや。」(同上)として、以下にその詳細を述べる。義経と景時が壇浦合戦の直前、軍議の席で対立した場面を描いた後、「それよりして梶原判官をにくみそめて、つるに讒言して失ひけるとぞきこえし。」(巻十一「鷄合 壇浦合戦」)の一文を附する。

このように、大きな事件を生む原因を、小さく明らかなで註きこに、象徴的に求めて説明する手法を作者はしばしばとっている。それは、史実と異なるかもしれないが、わかりやすいし、効果的でもある。それでは、平家の滅亡に、それに該当する場面は存するであろうか。冒頭から読み進めていくと次のような記述が、登場して

「平家も又別して朝家を恨奉る事もなかりしほどに、世のみだれそめける根本は」(巻一「殿下乗合」)

佐々木八郎氏「平家物語評講」は、この部分を「(法皇も適当な機会がないから平家を御戒飭遊ばされる事もなく)平家もまた特に皇室を恨み奉るということもなかったのだが、さて世の中が乱れだした原因は」と口訳され、諸氏の訳も概ね一致する。確かにそういう本文である。だが、これは直接にはどのような戦闘場面とも結合していない。この本文に続くのは、重盛の子資盛が摂政基房と路上で会って答礼せず、基房の家に暴行を受け、これを怒った清盛が重盛の制止も聞かず部下に命じて基房の車を襲撃し恥ずかしめるという話である。この事件は、これで一応落着するし、基房がこれを恨んで平家滅亡を策するわけでもない。にもかかわらず作者がこれを「世の乱れそめける根本」とするのは、「これこそ平家の悪行のはじめなれ。」(同上)だからである。

作者はこれ以前の段階でも、平家の栄花を描いているが、それを批判はしていない。だから、ここで作者が「世のみだれ」と言い、「悪行」というのは、単に資盛や清盛の行動、それが社会に起こした、ある意味ではささやかな混乱のみを指して言っているのではあるまい。平家滅亡の原因と結果の一つの総括ともいえるべき、灌頂巻「女院死去」での建礼門院の述懐で、彼女は、壇浦で生きのびた人々のその後の悲惨な日々を語ったに続けて、次のように言っている。

「是はたゞ入道相国、一天四海を掌ににぎて、上は一人をもおそれず、下は万民をも顧ず、死罪流刑、おもふさまに行ひ、世をも人をも憚られざりしがいたす所なり。父祖の罪業は子孫にむくふと

いふ事疑なしとぞ見えたりける。」

「世のみだれそめける根本は」の一文は、これに照応するとみるべきであろう。即ち、平家のおごった行動は、それ自身が世を乱すという点で悪行だったのみではなく、平家の滅亡と、その具体的過程である源平合戦という、大きな「世のみだれ」の原因となった点でも悪行だったのである。そして、そうだとするならば、この事件にはじまって、「大臣流罪」「法皇被流」「都遷」など、およそ「上は一人をも恐れず、下は万民をも顧ず、死罪流刑、思ふさまに行ひ、世をも人をも憚られざりし」清盛の行動が描かれている部分のすべてに、平家滅亡の原因は存しているといつてよい。

建礼門院は「罪業のむくい」と表現しているし、「平家物語」の中盤から後半にかけて、神仏が平家を見捨て、源氏に味方しているという記述は、くり返し登場する。見ようによっては、後半の源平合戦は、神仏の判定の執行にすぎない。その神仏の判定は、「平家」の前半のどの時期かに、既に下っているのである。

作者は、そのような神仏の判定が存在し、そしてそれが正しいことを、読者や自分に納得させるために、さまざまな工夫を行なっている。平家以外の人々について、いくつかの例を見よう。

物語中で最初に平家への反乱を企てる、鹿谷の変の主謀者、成親に対し、作者は終始「是偏に天魔の所為とぞみえし。」(巻一「鹿谷」)、「よしなき謀反おこいて、我身も亡、子息所従に至るまで、かかるうき目をみせ給ふこそうたてけれ。」(巻二「徳大寺之沙汰」)と冷淡である。既にこの段階では、成親と同様に、平家の専横に批判的な作者の、この反応は奇妙に思える。その疑問を一応納得させるのは、成親が、大将になる事を神に祈った際、悪い託宣ばかりが出

た、という叙述である。結局大将になれなかった成親は、それを平家の専横故と恨んで謀反を決意するのだが、この叙述がある限り、成親の平家への恨みは不当であり、神仏の意に沿うものではなかったこととなる。だが、それだから作者が成親に冷淡なのとは言えない。むしろ、作者が成親に冷淡だったからこそ、神仏の判定が成親を支持しないという場面が作られたのである。ではなぜ、作者は成親に冷淡なのか。谷宏氏は作者が京都の共同体の一員という立場から成親を批判しているとされる。私はもっと単純に、作者は因果応報観の破綻を恐れて、もしくはそれを貫こうとして、成親の企図は神仏の意によっておらず、したがって失敗するしかなかったという図式を作ったのだと考える。失敗した反乱は、手段のみならず目的も、誤っていないければならなかったのである。

平家への第二の反乱ともいふべき、高倉宮事件でも、作者は首謀者の頼政を「よしなき謀反おこいて、宮をもうしなひまいらせ、我身もほろびぬるこそうたてけれ。」(巻四「鶴」)と、成親の場合とはほぼ同じ言葉を用いて非難する。しかし、この時は既に平家の悪行をかなり描いた後なので、作者の批判は鋭さを欠く。とりわけ王法を重んじる作者にとって、高倉宮がこの乱の中心であることは、成親の場合のように単純な因果応報の適用を許さない。そこで作者は、この乱が誤りであるにもかかわらず、高倉宮が思いついた原因を、相少納言なる人相見に求める。「この事いかゞあるべからんとて」迷っていた宮に、すぐれた人相見の相少納言が、位につく相がある」と告げたため、宮は「さてはしかるべき天照大神の御告やらん」と決意したとして、「これは相少納言が不覚にはあらずや。」(巻四「通乗之沙汰」)と批判しておわる。

歴史上の事実について、自他ともに納得できる説明をつけようとする作者の姿勢は、このように、かなり強い。そして、はじめに述べたように、一方で作者は、それを、象徴的な挿話などを用いて、わかりやすく印象的に語ろうとする傾向を持つ。

この物語の中心である平家一族の滅亡についても、作者は諸行無常という語で限界は予告しつつ、あくまで因果応報というかたちでの、説明をつけようと、その原因を分析する。滅亡が神仏の怒りなら、平家のような点がその怒りを招いたのか。建礼門院のことにみるように、またこれまでの研究が指摘するように、王法や、民衆に対する平家の態度に問題があったと作者はとらえているようである。それは、おそらく歴史的には正しい分析ではない。しかし、「平家」の作者は自らの実感として、そのようにとらえたい。それをさぐってゆく過程で、またそれを読者に広めてゆく過程で、なるべくわかりやすいかたちで、表現しようとしたはずである。

いったい、「平家」はすぐれた文学であることは疑いないが、まだ歴史的資料として扱われすぎないように思う。小さな、事実との差とあった程度ではなく、かなり徹底して事実を無視している作品、ほとんど古事記や日本書紀にも等しい図式化や擬人化が、話をわかりやすくするために用いられている作品という印象を、私は、「平家」に抱いている。

先述の「世のみだれそめける根本」と作者が考えた、資盛と基房の争いの際、資盛を叱ったのは父の重盛、基房を恥ずかしたものは祖父の清盛と「平家」は記すが、周知の如く、これは事実と反していて、基房を攻撃したのは実は重盛であったともいう。まさに事実はそのように、重盛も含めた平家一族の人々すべてが、それぞれに、

時にはおごり、時にはそれをたしなめ、様々な対立や葛藤を経つつ、全体としては滅亡に至る方向に動いていったというものであろう。しかし「平家」においては、作者が考えるところの滅びの原因となる行動を常にとるのは清盛であり、おしとめるのは常に重盛であるのは、これもまた周知の通りである。^註

私見によれば、これは作者が、平家滅亡の原因となつたものと、それを阻止しようとした力、あるいは、現実を起こつたことと、うならなかったかもしれない可能性を、前者を清盛、後者を重盛という人物にかりて、自分なりに追及してみているのである。前者が清盛に仮託されたのは、彼が平家一族の中心であり、事実もそれに重なりあうことが多かったからであろう。重盛が後者に選ばれたのは、彼が早逝したからである。何しろ、現実には平家は滅びているのだから、「こうすれば滅びなかった」可能性は、可能性としてしか存在しない。なぜそれが現実にならなかつたかを最も合理的に説明するには、途中で存在しなくなった人を、その体現者として選ぶことである。重盛が現実にはどのような人であったにせよ、こうして彼は「実現されなかつた正しい方針」を主張した人として、「平家」の前半において「実現された誤つた方針」の体現者である清盛と対立する役割を与えられたのである。

大勢の人の手を借りつつ、長いことかかって成立してきた故であろうか、「平家」には、伊藤整が「小説の方法」で、そのような種類の文学について「恐ろしい調和」と表現したような、^註自然さがある。不自然なものは切りすてられ、あるいは納得できる理由を附加される。重盛の人物像もまたそのようにして、潤色された。それは、今日では過度なまでの美化として時に反発を招く。^註しかし、彼のおか

れた作品中の位置自体が、それを要求するものだったのである。

二 人間の努力

重盛の死を境として、平家一族の内部における、「神仏に見限られるか、それを防ぐか」の対立は概ね終焉する。神仏の判定は下って、平家は見はなされ、それを示す前兆があちこちに登場してくる。前章でふれたように、後半の源平合戦、源氏の勝利と平家の滅亡は、全体の流れの中では、その神仏の判定の執行として記されているといつてよいであろう。

そのはずなのであるが、しかし「平家」には奇妙な二重構造のようなのがある。神仏の判定による因果応報としての戦闘の勝敗を描きながら、実際には、現実の戦闘における勝敗の原因を作者は常に追及している。しかも、その原因は常に、人間の知恵や意志といった、現実的なものであり、直接に神仏と結合してはいない。

たとえばホメロスの「イーリアス」で神々は、あるいは姿を現わして共に戦い、あるいは一方に有利な天然現象を起こす。時には支持する方の勇士の一人に化けて仲間を励まし、また、支持する勇士の心に勇気を吹きこんだり、手足に力を与えたりする。「平家」にはそのようなかたちでの神仏の介入は、いっさいない。神仏の判定の結果といいつつ、現実には常に人間によって、勝敗は決定し、その過程に作者はいつとも、あくなき興味を抱いている。そして、それなりに原因をつかむと、これまでしばしば見てきたように、抽象化し図式化した挿話として、わかりやすく読者にそれを伝えようとする。

だが、個々の戦闘の勝敗について、作者が行なっている分析と、示している結論には、実はかなり明確な傾向があって、一口に言うとはそれは、積極論の評価と支持である。というよりも、これ以外の軍事的基本というものを、「平家」の作者は有していない。^{註11}

佐々木八郎氏も「平家物語評講」で注目された「橋合戦」(巻四)の足利又太郎忠綱、「宇治川先陣」(巻九)の畠山重忠、「坂落」(巻九)の佐原十郎義連は、いずれも、突撃をためらう味方や上官に反論し、ただ一人先頭を切つて突進し、結局はこれが勝利をもたらす。佐々木氏はこの三人に類似を認められており、私も同感である。「藤戸」(巻十)の佐々木盛綱の先陣も、これに加えてよいだろう。そして、このような行動が戦闘の勝敗を決定する重要なものとして描かれるところに「平家」の一つの特徴がある。

これらは戦闘直前の行動である。それほど派手ではないが、勝敗決定の要因としてより重要なのは、多く戦闘前日の軍議で展開される、方針をめぐつての討論である。ところが「永寛議」(巻四)の真海の発言、「大衆揃」(同)における源寛対仲綱の対立、「富士川」(巻五)の維盛に対する忠清の返答、「三草合戦」(巻九)の田代冠者の発言、いずれも積極論は勝利に、消極論は敗北につながっている。真海は敵の味方をしていて、その発言は故意の引きのばしだが、それが消極論というかたちをとるのに注目したい。他にも、「願書」(巻七)で、義仲に敗れる平家軍は消極的行動の故に敗北しており、「弓流」(巻十一)で、屋島合戦の夜、平家が源氏に夜討をかけたのは「運のきはめ」という記述もあって、積極果敢な行動が勝利の原因となるという図式を否定する例が、「平家」にはない。

これがどれだけ、事実に基づくものなのか、作者の実感の反映か、

私には判断できない。「保元物語」でも、勝敗の分れ目は、為朝の主張する夜討というかたちでの積極論が否定されたところにあるとされている。そのような軍記物としての伝統もあろう。また、終始果敢な攻撃で勝利をおさめた印象の強い義経の存在が与えた影響もあろう。

だが、当然ながら、実際の戦闘は、そのように単純な二元論で解決できるものではあるまい。洋の東西を問わず、たとえば、「三國志」「水滸伝」などを見てさえも、戦いの様相はそのような図式化を拒むほど多彩であり、積極論故の敗北も、また数多く存している。源平の時代にもそのような実例がなかったわけではない。「平家」の中でも、たとえば「洲保合戦」(巻六)の戦闘は、積極論故の源氏の敗北とも見えるし、「富士川」(巻五)の勝利の後で頼朝がいったん鎌倉へひき上げるのは消極論で、結果としてこれは成功する。しかし作者は、そのような事例については、印象的な場面を作らず、検討も行なっていない。

その功罪は、ここではさておく。そのように比較的単純な基準によって、勝敗の原因を分析した作者は、それを、二人の人物の対話という形式で、多くの場合、読者の前に提示している。そのような時、正しい発言、誤った発言の主として、それぞれ選ばれる人物は、事実に基づくこともあるが、基かないこともあり得たと私は考えている。作者も、読者の要望も、戦闘の勝敗の原因を知り、納得したいという気持が強かったとすれば、それをわかりやすく説明するためには、戦闘に参加したとされている者の名から、最も著名な二人を選んで相反する意見を語らせるのは、むしろ自然な方法であらう。

作者が、実際の戦闘については、神仏の意志とは切りはなした分析を行なうこと、その分析は、かなり単純な基準に基き、わかりやすい説明を眼目として必ずしも事実を忠実に反映してはいないと、を見てきた。更に前章で、作者が、平家一族が滅亡にいたる、平和時における原因を、清盛対重盛の対立という形式で、さぐらうとしていたことを述べた。

では、そのような作者は、後半では平家が滅亡するにいたった軍事的な要因を、どのようにとらえ、表現しようとしているだろうか。既に神仏の意志が決定してしまっている以上、前半ほどの力は持ち得ないが、やはり平家にとって、滅亡にいたるその瞬間まで「実現されなかった正しい方針」が、その時々は無数にあり得た、と、おそらく作者は考えている。そして、その方針を主張する人物に、作者は知盛を選び、彼が常に対立し、敗北せざるを得なかった「実現された誤った方針」を持つ人物に宗盛をあてた。この役割分担は、前半の清盛対重盛の場合と同様、後半部を通して、一度もゆらいでいない。

平家の敗北に関する現実的あるいは具体的原因として、作者が重視しているのは、都落という方針である。その方針の根拠を、作者は宗盛の女院への説明というかたちで述べている。「今はたゞともかうも、そこはからひにてあらんずらめ」(巻七「王上都落」)と女院はこれを肯うが、平家の忠臣貞能は「西国へくだらせ給ひたらば、おち人としてあそこ、にてうちちらされ、うき名をながさせ給はん事こそ口惜候へ。たゞ都のうちでこそいかにもならせ給はめ」(巻七「二門都落」)と批判し、宗盛が女院に対したと同じ説明をすると、都へ引返して一門と別れる。

この場合、宗盛と対立する正論の中心は、むしろこの貞能の発言であり、知盛は、「其時新中納言涙をはらはらとながいて、『都を出ていまだ一日だにも過ぎるに、いつしか人の心どものかはりゆくうたてさよ。まして行すゑとでもさこそはあらんずらめとおもひしかば、都のうちでいかにもならむと申つる物を』とて大臣殿の御かたをうらめしげにこそ見給ひけれ。」(巻七「一門都落」と貞能の發言をくり返すのみである。後に「逆櫓」(巻十一)でも彼は同様の述懐をしていて、やや愚痴めいた印象さえ与える。しかし「誠に理と覚えて哀なり。」の一文をそれに附加しているように、作者はここでも知盛をむしろ支持しているようである。

その後、「法住寺合戦」(巻八)で平家は義仲との連合を、「請文」(巻十)では法皇からの交渉を拒否する。これが正しい選択であったか、歴史的な判断は困難であるが、明白な悪い結果は招いておらず、少なくとも「平家」の作者は、正しい選択と判断していると、前後の文脈からはうかがえる。とすれば、敗走を続け、判断を誤りつづけた中で、この二つは少なくとも平家一門がとった正しい処置とわいていい。これはいづれも、知盛の主張がいれられた決定と「平家」は記している。

更に、知盛の主張が決定的に正しくなるのは、壇浦海戦前の阿波民部重能の処分に關してである。これは、戦闘の準備万端を終えた知盛が宗盛の前に来て、重能の首をはねようとするのに対し、宗盛は重能を呼び出してとり調べるものの、結局そのまま返してしまい、知盛は終始「あはれきやつが頸をうちおとさばやとおぼしめし、太刀のつかくだけよとにぎて、大臣殿の御かたをしきりに見給ひけれども、御ゆるされなければ、力及ばず。」(巻十一「鶉合 壇

浦合戦)という、非常に緊張した場面となって描かれている。この結果、阿波民部は無事に生きのび、裏切りを執行し、それは平家にとって致命的となる。

「新中納言」やすからぬ。重能めをきてすつべかりける物を」と、ちたび後悔せられけれどもかなはず。さる程に、四国・鎮西の兵ども、みな平家をそむいて源氏につく。いままでしたがひついたりし物どもも、君にむかて弓をひき、主に対して太刀をぬく。かの岸につかむとすれば、波たかくしてかなひがたし。このみぎはよらんとすれば、敵矢さきをそろへてまちかけたなり。源平の国あらそひけふをかぎりとぞ見えたりける。」(巻十一「遠矢」)

「さる程に」以下の描写は、もはや眼前の事実ですらない。平家一族のおかれた状況が決定的に救いのないものとなったことが、いわば抽象化された表現で象徴的に語られる。これ以後は平家の人々もはや勝利を考えず、ひたすらに死に向って急ぐのである。まさに「源平の国あらそひ、けふをかぎり」となったのであり、冒頭における「殿下乗合」の「世の乱れそめける根本」と対応する。あるいは同じ重さを持つ、現実的軍事的戦闘の終焉であった。

それをもたらしたのは阿波民部の裏切りであり、それをくいとめることのできた方針を主張したのが知盛であったと「平家」は描くのである。最終段階においてもそうであったし、最初の段階の「都落」についても彼は、正しい方針を主張していたとするのである。その間、平家一門がとった比較的正しいと思われる判断は、すべて彼の主張したものとされている。

これが現実の反映とは、考えにくいものではあるまいか。清盛と重盛の場合と同様、都落以後に平家一門がとった方針の決定は、宗盛

も知盛も含めてその時々何人もが討論し、迷い、決断したものであり、その過程では知盛も誤った方針を主張したことが一度ならずあったはずである。^{註13}しかし、「平家」の作者は、宗盛や知盛が実際にどのような人物であったかには、さほど興味を抱いていない。平家一門が滅んだ理由を最もわかりやすく追求し、表現するために必要な二人として、この二人を選んだ後は、ただ、互いの役割にふさわしい発言と行動を、徹底してとらせつつづける。

「実現された誤った方針」の体現者として宗盛が選ばれたのは、清盛と同様、彼が総大将だったからであろう。そして、清盛に比して彼が卑少で愚かでみじめなのは、清盛の時代には、おごって悪業をなす平家一族が、彼の時代には、そのむくいと苦業をうけ、弱体化し滅びていくために必然的に創られる性格である。清盛と彼とは、その時々平家そのものとして描かれたのである。^{註14}

一方、知盛はどうか。大胆な推測が許されるなら、現実の彼がまったく何もしない、何の意義もない存在であったからかもしれないと思う。この間の平家が、ことごとくに敗北し、みじめに誤りつつける以上、その中で、とるべき行動をとり、正しい方針を主張していた人物は、ほとんど、架空の存在である。早逝した重盛と同様、現実には、これといった活躍もせず、特に行動の軌跡も残していない人物の方が、「実現されなかった正しい方針」の主張者としては、より設定しやすく、選ばれやすいはずである。そう思ってみれば、「平家」に登場する知盛は非常に魅力的だが、その魅力の一つ一つは、たとえば義経の勝利とその後の没落、重衡や宗盛の虜囚と処刑のように、事実で検証できるものが少い。重盛の場合と同様、作品の中でおかれた位置にふさわしいものとして、人々が作りあげてゆ

くことが可能なものが多いのである。

現実の知盛が、そのように影の薄い存在であったかもしれないというのは、私の一つの想像にすぎなくても、その想像を許すほど、知盛にせよ、その他の誰にせよ、その個人的性格については、「平家」を通して以外に知ることは困難が多い。そして「平家」のそういった点での正確さについて、私は前述したように強い不安を抱くのである。

「平家物語」については多くの論が既にある。管見の限りでは、それらによって私のこの不安は消せなかった。歴史的事実と、この物語の創作性がいま一つ明確に区別されておらず、時にはそれがあいまいなまま、互いに支えあって論が展開されているという印象がぬぐえない。それはまた、言いかえれば、「平家」の作者が、歴史的事実をゆがめてまで何かを書こうとする情熱、その骨格となる思想の存在の無視でもあるのではないかと思えた。

たとえ、作者が複数でも、いや、複数ならなおのこと、その時代の多くの人が求めた、歴史的事実以上の何かがそこにあり、そのために、個人も、個々の戦闘も、史実とぎりぎりの妥協をしつつ、脚色され、潤色されてゆくだけの力を、それは持ち得ると思う。

それが何かということ、ここで一口には言えない。少なくとも、因果応報という名で作者が表現した、歴史の法則性への興味もその一つだったと言っておこう。なぜ平家は滅びたのかを、わかりやすく読者は知りたいと望み、作者はそれに応えようとした。

そのために、前半では、清盛と重盛、後半では、宗盛と知盛の対立によって、それがさぐられるという構成が生じている。この他にも多くの要素を「平家」は有しているが、それらは、この構成を混

乱させたり破綻させたりはしていない。^註

知盛が作品中で、そのような位置に存している以上、さまざまな意味で、彼が人々をひきつけ、注目させるのは当然であった。常に正しい発言をし、とるべき行動をとるからというだけではない。正しい判断が常に現実の勝利となり、成果となって現われた義経や、一定の効果をおさめ、それなりに平家の崩壊をくいとする力ははたした重盛（いずれも作中人物としての）とは異なり、知盛の方針や判断は、ただ、物語中に存在しただけである。それ以上の力を有して、彼がなんらかの成果を上げれば、史実が変わってしまうことになる。それには例えば滝沢馬琴が、「権説弓張月」で為朝を生きのびさせ、「傾城水滸伝」で鎌倉時代に女性の政府を実現させるような、史実を無視して虚構を構築する、狂気と紙一重の強い精神が必要とされる。そこまでの決意のつかぬまま、「平家」の読者たちと作者たちとは、史実を変えぬ限界まで知盛像をふくらませたが、それ以上になることの危険性もおそらくは感じていた。それもまた、知盛という人物の、魅力の一つとなったと思う。歴史的事実に材をとる物語の、ひいては文学全体の根底に横たわる、事実と虚構の問題に、ぬきさしならずかわる位置にも、彼は存しているからである。

註

- 1 「日本文学」（昭和43年6月号）の「二ツの知盛像」で以倉紘平氏は、このような知盛像は本来のものではなく、四部合戦状本から語り本系の諸本への過程の中で次第に作りあげられていくことを指摘された。
- 2 このような類似の場面に「年ごろ口比もあればこそありけぬ」といった類の常套句が用いられるのは、表現の未熟さではなく、図式化というか

たちでの洗練であろう。

- 3 「平家」における神仏は儒仏神が混在して複雑だが、ここでは人間以上の大きな存在として、この語を使用しておく。
- 4 「都遷」以後「物怪之沙汰」を中心に、巻七「願書」、巻十一「志渡合戦」「遠矢」など、神仏が平家を見放し、源氏を支持していることを示す予兆や託宣は念入りに記されている。
- 5 谷宏氏「中世文学の達成」。
- 6 「別冊国文学・No.15」の「史実と虚構」で松尾葦江氏は頼政の動機も、相少納言の告知も「史料のうえで確かめることはできない。むしろ事件の背景と解釈とを叙事によって語らしめた一方法というべきであろう。」とされ、更にこの種の記述においては、「虚構の意図が問われねばなるまい。」と述べられる。
- 7 安田元久氏は「平家の群像」（塙新書）、「権勢の政治家、平清盛」（清水新書）などにおいて、後者では近代の教科書などもひきつつ、このような清盛像、重盛像の史実との差や形成過程を考察されている。
- 8 「大勢の作者の手になる神話や、それに類する文学作品は）構造は鋭くなく、不安定なように見え、人物は性格の角を鈍らされ、非写実的で反自然的な感情の高まりがあり、論理的な現代人の考えからすると、それは幼稚なものに見えながら恐ろしい調子を持っている」。
- 9 拙稿「重盛像の変遷」（語文研究）64号）。
- 10 呉茂一氏訳、岩波文庫「イリアス」で、海神ポセイドンは自らギリシャ軍の先頭に立ち、（中巻第十四書、太陽神アポロンは駕をかけてヘクトールをアキレウスから逃がし（下巻第三十書）、アイネイアスの胸に勇気を吹きこみ（上巻第五書）、女神アフロディテは友人デーイオボスに化けてヘクトールを励す（下巻第二十二書）。このような例は他にも多い。
- 11 他に目につくものとして、一騎打の際の郎党の活躍がある。しかしこれは、他の大きな問題ともかわると思うので、稿をあらためて述べたい。
- 12 「平治物語」でも義平が夜討をすすめていられず、敗北する。他に「保

元物語」で義朝が信西の意見に従って白河殿に火をかけ、「平治物語」で清盛の都落の方針に対し重盛が反対して、それらが、勝利につながるのも、積極果敢な行動が勝利を納めるといふ図式が軍記物に生じる傾向を示すだろう。

13 義仲との和平について、上横手雅敬氏「平家物語の虚構と真実」（塙新書）は、「おそらく実際に平氏内部でも、主戦論と和平論とがあったであろうが、それぞれを知盛と宗盛とが代表したかどうかは疑わしい。」とされている。

14 むしろ「一門大路渡」（卷十一）に見える宗盛の「不思議な落ち着きよう」（別冊国文学No.15、「平家物語全章段の〈解析〉」牧野和夫氏）やしばしば見せる情深さが、このような役割と矛盾してもなお、人々に語り伝えられた真実であり、彼の実像に近いのかも知れない。だが、それも断定はできない。「誤った方針」が具体的には「優柔不断さ」「弱さ」として表現されるとき、それは強調されつづけることによって、逆に「情深い人物」という方向での役割の強調と、美化をも生み得るからである。

15 鈴木則郎氏は「別冊国文学No.15」の「平家物語鑑賞と研究の手引き——人物形象論を中心に」で、「人物形象論は徹視的な視点であるかのようにもみられるが、主題や構想、世界観のごとき巨視的な視点との関連で展開されるのが常道なのであり、結局は主題論、構想論世界観の問題に帰着すると考えられる。」と述べておられる。同感である。本稿で充分に述べた余裕がなかったが、このような構成を生んだ、作者のより根底にある傾向について、いずれ稿をあらためてふれたい。

（昭和63年10月31日）